

や

やるぞ～

ま

まけないぞ～

が

がんばろうぜ～

た

楽しい学校になるように

つわもの

山中の強者どもが夢の跡！

教員1年目に、女子のバドミントン部の顧問を命じられた。競技経験はなかったが、見よう見まねで毎日子どもの相手をしているうちに、それなりの競技力を得るのにさほど時間はかからなかった。気力・体力は人生のピーク時だった頃で、来る日も来る日も生徒以上に汗びっしょりになって指導した。

競技実績に関しては無名の中学校だったが、2年目にダブルスペアが県大会で3位入賞し北信越大会出場を果たした。無我夢中で得た快挙に歓喜した。

次に異動した中学校は、これまで何度も県大会を制している県内一のバドミントン強豪校。野球部を担当したいと希望したが、前任校での実績があったが故に再びバドミントン部の顧問となった。部の運営方針や指導方法を前任者と大きく変えたせいもあり、生徒や保護者としっくりいかなかった。自分がかなり有頂天になっていたのも原因だ。部活動名門校であるがゆえのプレッシャーもありもがき苦しむ日々。結果もついてこないで焦るばかりだった。

自分の思い通りの部活動運営による戦闘モードの体制がようやく整ったのは、自分が赴任した時に入部した1年生が主力となった3年目のことだ。

あの日もうだるような暑さだった。シャトルが風で揺れないように、競技は館内締め切りで行われる。外気温30度を超える真夏日、場内にいる人間の熱気も手伝って、密閉された体育館はまさに蒸し風呂状態だった。8面あるコート上は、どこもかしこも正に殺気立った戦いが繰り広げられていた。

ダブルスの個人戦。この試合に勝てば県大会の入賞(8位以上)が決定する。相手は、これまで何度も練習試合や大会で対峙していた最大のライバル校のペア。過去の対戦成績は、3対7ぐらいでこちらの分が悪い。互いに団体戦を含めた連戦後の大一番。どこの学校も選手も必死だった。そして、15歳の少女たちの心と体は疲労の極限に達していた。

第1セット目を相手ペアに取られる。第2セット。追いつ追われつのシーソーゲーム。13対13の同点に追いつき、サーブ権を奪い返した。(よし、この調子。)と思った瞬間、こちらのペアが困惑した表情でコートに漫然と立ちすくんでいる。見ると、相手ペアの一人が腰を折り曲げた状態で下を向いて、何とも苦しそうに肩で息をし、右足をわずかに宙に浮かしている。どうやら、さっきのラリー中に足を捻ったらしい。再び自分の方のペアに目を移す。こちらはどうしていいのかわからず、棒のように突っ立っている。(何してんだ。)思わず「サーブ！サーブ！」と館内中に響く大きな声を張り上げた。

ふと我に返ったように、こちらのペアの一人がサーブの体勢に身構えると、相手も時間をかけてゆっくり状態を起こし、レシーブの体勢を苦しそうに整えて試合は再開した。足を捻った子の動きは明らかにぎこちなく、難なく2ポイントを連取し第2セットを奪取した。

限られたわずかなインターバルに、競技フロアから出た通路の片隅に選手二人を引っ張っていった。二人と向き合った瞬間、激しく怒鳴りまくった。

「馬鹿野郎、何やってんだ。遊びに来てんじゃないんだぞ。これまで苦しい練習をしてきたのは何のためだ。勘違いするな。おまえらは何も卑怯なことなんかしてないんだ。相手が足を捻ったのは相手側の責任だ。こちらのサーブの体勢に入っているのにいつまでもレシーブの体勢に入らなかったとしたら、それは明らかに遅延行為だ。ルール違反なんだよ。試合が続けられるような状態じゃないなら、向こうは試合放棄すべきなんだ。同情なんかしてたら勝てるもんも勝てないぞ。これまでの努力を無駄にする気か。わかったか。」

自分の叱咤に軽く頷いたものの、二人の目はうつろだった。

最終第3セット。結果は明らかだった。足の痛みと思うように動けないもどかしさで、相手ペアの一人は終始肩で息をし脂汗を流し苦渋の表情を何度も見せながらミスを連発した。我がダブルスペアの勝利はあまりにもあっけなく訪れた。試合後、対戦ペアは周囲を憚らずに泣き崩れた。

勝った。多分、相手が完調だったら勝てなかったかもしれない。しかし、こんな後味の悪い勝利は初めてだ。勝ったこちらのペアにも全く笑顔はなかった。必死に自分を正当化する言葉を探した。そうだ俺たちは何も悪くない。勝利して何が悪い。子どもたちだって厳しい練習に堪えてきたんだ。立派な勝利だ。正当な勝者だ。胸を張っていいんだ。

続く準々決勝で、あっけなく敗退した。分がいい相手だったのに、こちらのペアのプレーは大いに精彩を欠き散々な内容だった。さっきの試合が尾を引いていたことは明らかだった。そしてこれが彼女ら二人の中学校時代最後の公式戦となった。試合後「先生、勝てなくてすみませんでした。」……。

何を言ってるんだ。謝らなくちゃならないのはこっちだろ。俺はこれまで一体何を教えてきたんだ。「正々堂々と戦え！」「勝つこと以上に大切なことがある！」と繰り返し言い続けてきたのは誰なんだ。なのに一番土壇場で勝利に固執する醜い感情を爆発させてしまった。たとえ競技のルール上は問題なくても、教育者としては失格だ。

県のベスト8。たいしたものじゃないか。思えば、あの時サーブやプレーを躊躇したあの子たちを、一体誰が責められようか。それでなくても、うちのペアの二人はどちらも、日常の学校生活でも誠実でまじめで、人一倍心優しい性格の持ち主なんだ。当時も今も誇りに思う最高の教え子の二人なんだ。

部活動をはじめとするスポーツや芸術の実活動は、本当にいいものだ。教科書やタブレットでは得られないだろう様々な教訓を私たちに与えてくれる。

でも、適当に生きている人間に教訓は響かない。ひたむきに走り続け、必死にボールを追い、本気で勝ちにいき、最後まであきらめず、無我夢中に取り組む人間にのみ、感動は与えられ、教訓が次への道への扉を開けてくれる。

いよいよ市内大会本番。山中生よ、『渾身の力で戦い抜け！』。ものごとくに全力で立ち向かった人間にしか、戦いの後に、新たなる壮大な景色が目の前に現れることは絶対はない。ナイスゲームがナイス人生につながるのだ。